

第5回・図書館講演会「著者と語る」

「ウルトラマンから寅さんまで、
監督・脚本家・作家の執筆現場」
神楽坂ホン書き旅館「和可菜」の50年

黒川 鍾信^E

第5回図書館講演会「著者と語る」は、2002年11月8日（金）午後2時30分～午後4時に和泉図書館第1開架閲覧室で行われた講演の記録です。（編集部）

^Eくろかわ・あつのぶ / 短期大学教授 / 英語・英文学専攻

司会 本日は、図書館講演会「著者と語る」にご参加いただきありがとうございます。
ございます。

図書館主催の講演会「著者と語る」は、今回で第5回目を迎えました。
5年目であります。これまでの講演会につきましては、図書館が毎年発行
しております『図書の譜』という雑誌に掲載しておりますのでご覧いただ
ければと思います。

講演会「著者と語る」は、先生方に、ご自身の著作、または図書や読書
にまつわるお話をいただき、本を読む楽しさを、皆様とともに共有できれ
ばと考え、企画しております。本を読むのが楽しみとなり、そして図書館
を前よりも利用していただければと願っております。

本日も講演をいただくのは、明治大学短期大学教授の黒川鍾信先生で
す。皆様にお配りしましたパンフレットに黒川先生についての紹介がござ
います。明治学院大学大学院を修了され、アメリカ、イギリスに留学の後、
明治大学短期大学に着任されました。

パンフレットに著書の紹介をさせていただきます。先生の著書は図書館で所
蔵しておりますので、利用していただければと思います。また、この下1
階参考室に、今日の講演にちなみまして展示しておりますので、展示
ケースをご覧いただければと思います。その展示ケースの中に、きょうご
講演いただく『神楽坂ホン書き旅館』とその他の著作も展示してございま
すのでご覧いただければと思っております。

本日のご講演は、この著書の最後に記載してあります『神楽坂ホン書き
旅館』についてであります。先生のお話の中には、有名な映画監督、脚本
家、作家が登場いたします。

本日お配りしましたパンフレットに、旅館「和可菜」の写真と、神楽坂
の案内図を掲載しましたので、想像をめぐらせながらお楽しみいただけれ
ばと思います。それでは黒川先生お願いいたします。

出版談話 60の手習い

黒川 黒川でございます。私の経歴などが書かれた紙がお手元にあると思
います。先ほど受け取って、私自身おやっと驚いたことがあります。ここ

のところ7冊か8冊本を出しているはずなんですが、テーマが滅茶苦茶と
いうか、一貫性がないので、自分で驚いているわけです。前は、経営バ
トタッチ、今回は色町の神楽坂、その前は犬とか猫とか、1冊1冊全く
違うことを書いている。自分でも何をやってるのだろうと、いま反省して
いるところなのです。

ふだんこのような一覧表で自分の著作を見ることはありません。忘れてい
るわけです。それと、本というのは、1回出てしまうと、校正が終わった
瞬間から忘れないと次へ進めません。毎回、本が出た瞬間に、書店に並ん
だら、もう一切、書店にも行かない。そうしないと、怖くて先へ進めない
ものです。

いまふっと思いついたのは、ちょうど55歳になった今から9年前の誕生
日の朝のことです。なんだか急に長生きがしたくなりました。それで、ど
うしたら長生きできるだろうかと、その日、半日考えました。その結果、
やっぱり健康第一だということになり、ニンニクを食べたり、ゴマを食べ
たり。近所のスポーツセンターへ行ったら、今なら入会金がタダだとい
うので入会したりして、健康のことばかり考えて日々暮らしていました。そ
んなある日、ルームランナーで走っていたら、何だかむなしくなった。隣
を見ると若い青年が、今日みたいな天気がいい日なのに汗だくでルー
ムランナーで走っている。それは自分の姿でもあるわけで、こんなことを
して長生きしてもしようがないや。じゃ、何をしたらいいのだろうと思案
に暮れているうちに、ふっと思いついたのが、そうだ、これから毎年1冊
ずつ本を出すぞ、でした。そういう決心をしたのが、55歳の誕生日から
3ヶ月ぐらいたってからのことです。

そのとき決めたことは、専門分野の本は一切カウントしないで、テーマ
を変えて年1冊で、計30冊書くぞ、でした。どうしてそうなったかとい
うと、最初は10冊を目標にした。これだと65歳で死んじゃうことになる。
もっと長生きするためには、大きな目標を立てなくてはとなって、結局、
30冊になったのです。そうすると、少なくとも85歳まで生きられる、と
いうことで始めたわけです。

1冊目はスイスイ書けまして、さあ出版しようと思ったら、どこの出版
社も引き受けてくれない。あらゆるところを回ったのですが、「こんなに

積んでありますよ。持ち込み原稿は」と、どこの出版社へ行っても、編集者の顔が見えないくらい机の上に持ち込み原稿が積まれているわけです。

本が出ないとわかったので、しょうがない、自費出版にしようとしたのが、『大草原に輝いた101人』という本だったのです。ところが、この本は新聞とかラジオでえらい評判になりました。というのは、内容がアメリカに日本語を広めた若い人たちの奮闘記だったのです。私とその先頭に立ち、101人の人たちと6年かけてアメリカの高等学校で日本語を教えた実話です。非常に反響を呼びました。「自費出版で黒字を出すのはめずらしい」と言われました。

2冊目からは、書けば出版社のほうで出してくれるようになって、8年が過ぎました。今7冊目が出て、現在8冊目を書いているわけです。この調子でうまくいけば、あと22年生きられることになります。それまで頑張ろうかと思っています。

毎回テーマを変えると、つながりのない作品ばかりが書き上がるのではないかと思います。不思議なことに、書いている作品が終わる3ヶ月ぐらい前になると、そこで書き残したものの、あるいは、これは別の形で書かなければいけないというのが自然に出てくるわけです。例えば『東京牛乳物語』というのがありまして、これは一番ヒットした作品なのですが、牛乳のことを書いていると、猫のことを書かなくてはと思いはじめ。かつて牧場にはたくさんのネズミがいたので、猫は大事な従業員(?)だったのです。そうすると猫のことを調べなければいけない。ついでに犬のこともなる。これらは、まるっきり関係なくはないのですが、それにしても不思議に関連が出てくるんです。

実は、今日お話しする『神楽坂ホン書き旅館』というのは、私が最初に書きたかった本なのです。何しろ登場人物がすごい人たちばかりで、日本の映画界、あるいは作家や漫画家、テレビ界、女優、俳優が絡んできます。私が書きたいと言っても、この人たちが長期間滞在して仕事をする旅館の話ですから、ここの女将が許してくれないわけです。お客様のプライバシーにかかわることだからと。

この旅館の経営者は私の叔母です。私自身、この旅館ができた頃からしょっちゅう帳場に入入りしていたので雰囲気は知ってました。今日は

今井正監督が入ってるとか、今日は誰々が来てるとか、そういうことは帳場にいますとわかるものですから、ところどころの要点は知っていました。ただし肝心な部分は、叔母に語ってもらわないとつながらないわけです。それで5年前から語り役を頼んでいたのですが、承諾が得られなかった。

あきらめていましたが、叔母も今年で80歳になる。これは大変だ。日本で最後のホン書き旅館の記録として、いま書いておかなければ手遅れになると説得しまして、それで許可を得て書き始めたんです。

写真: 『神楽坂ホン書き旅館』 / 黒川鍾信著

この『ホン書き旅館』の「ホン」を、私はあえてカタカナで「ホン」としました。別に漢字の「本」でもいいんです。映画とか芝居の世界では、台本とか脚本とかを「ホン」と言うんです。業界用語です。ホンがいいからねとか、ホンがまだ仕上がらないとか、業界人は「ホン」という言葉をつかいます。これを漢字でやってしまうと、タイトルとしても良くない。神楽坂という色っぽい地名の下に漢字の「本」ではかたいと思い、カタカナで「ホン」にしました。これは私の造語です。

本や映画はタイトルしだい

本とかホンは、いくら内容がよくても、タイトルが悪いとだめなケースがあるわけです。逆に、著者はタイトルがいいな、これはいいタイトルだ

と思っても、それが相手に伝わらないこともある。

これは映画も同じです。日本映画の場合は、タイトルはそのものすばりですが、問題は外国映画を日本に輸入してきたときです。そのまま上手に日本語に訳せばいいものと、訳せないもの、例えば『ハムレット』という芝居をもってきて、これをほかの言葉には置き換えられません。『ハムレット』・『ロミオとジュリエット』、こういうものはいいのですが、英語のタイトルを日本語に訳すと、まるっきり通じなくなってしまう、意味がわからなくなってしまう、こういうものがたくさんあるわけです。それから、ある単語をちょっと工夫するだけでガラッと変わってしまうものもあるわけです。

学生時代に面白いアルバイトをしました。映画を観る。英語のタイトルがついていて、10人ぐらいで観て、これに好きなタイトルをつけると言われる。それでワーワー言いながら思いつくままにタイトルを述べていくわけです。それで、おまえのがいいとなって採用されるとお金をもらえる。採用されないと、映画を観てお終い。そういうアルバイトみたいなことをやりました。

例えば、『A Summer Place』というタイトルの映画が日本にきました。これは『避暑地の出来事』と訳されました。「避暑地の出来事」というと、ちょっと色っぽくなって、観ようということになる。これが「夏の場所」じゃどうしようもないわけです。

そういう例はたくさんあります。『The End of The Affair』、内容から判断すると「愛の終わり」となります。グレアム・グリーンというイギリスの作家の原作で、これを日本では、『情事の終わり』と訳した。「情事」というと若い人はわからないかもしれないけど、要するに昨今で言う「不倫」です。この「情事の終わり」と訳したのは1954年です。このときから「情事」という言葉がパッと広まるわけです。最近またそれがリメイク、つくり変えられまして、『ことの終わり』と訳されました。若い人が感動した映画『Dead Poets Society』は、『今を生きる』と訳しています。

こういうふうに、本でも、映画でも、芝居でも、タイトルひとつで当たるといふケースもあれば、タイトルがだめだったために、いいものが見向きもされないこともある。タイトルというのはとても重要なのです。

本を書く場合、タイトルが最初に決まると、後はスーッとというケースはたくさんあります。逆に、最後の最後までタイトルが決まらないというケースもあります。

ここでつかっている「ホン」というのは、台本、脚本。それから、今は何でも「家」をつけて「脚本家」と言います。脚本家という言葉は前からありましたが、一般にはつかっていなかったんです。今から30年ぐらい前までは、「脚本家」と名刺に刷る人はいなかったと思います。通称「ホン書き」と言っていたわけです。作家のことはホン書きと言いません。映画、舞台、あるいは音楽やイベントの構成なんかを書く人、これを「ホン書き」と通称呼んでました。これは業界用語です。

今日お話していく中で業界用語が幾つか出てきますので、先に説明しておきます。「カンヅメ」という言葉。これは映画だけではなく、映画会社や出版社、特に出版社が、かつてはよくやっていました。流行作家をつかまえて、1週間とか10日、旅館やホテルにカンヅメにする。編集者がつきっきりで原稿を書いてもらう。これをカンヅメと言います。カンヅメというのは、大手出版社の場合には、新潮社とか、文春とか、講談社とかは、それぞれ本社の地下、あるいは別棟に、旅館の座敷のようなものを持っています。そういうところを嫌う人には旅館に入ってもら。あるいは旅館がいやな人はホテルに入ってもら。こういう場合をカンヅメと言います。

ホン書き旅館あれこれ

明治大学に関係ある場所としては、このホン書き旅館というかカンヅメ旅館として、作家がほとんどですけど、有名なのが「山の上ホテル」です。これは「ホン書き旅館」「カンヅメ旅館」の老舗です。それから、明治大学附属中学校・高等学校のところに、こちらはもうなくなりましたが、「駿台荘」というのがあって、ここは作家よりも映画人がカンヅメになった旅館です。やがて「駿台荘」の娘さん大石静が『オードリー』というNHKの朝ドラを書いたときに、舞台は京都に移していますが、実際にはあそこでの、実家での経験などが、あのテレビドラマには盛んに組み込まれていました。これがいわゆる「カンヅメ旅館」、あるいは「ホン書き旅

館」です。

カンヅメになる人たち、これは職種によって、書くものによって違いますけど、作家の場合には非常に古くからカンヅメというのがあったわけです。例えば、島崎藤村は、『破戒』で成功したあと、『春』という自分の青春時代をモデルにした小説を書きました。これは東京朝日新聞の依頼による連載でした。藤村は、築地にあった「海水館」に、これはもう今はありませんけれども、約1年こもって、そこで『春』の準備から完成までを過ごしました。

それから、本郷に「本郷菊富士ホテル」というのがありまして、ここは大正時代の流行作家たちが、自分たちでカンヅメになった場所です。

つまり、本を書くためにカンヅメになる。そういう旅館、ホテルというのが、全国のあちこちにあったのです。映画人がつかう、映画の脚本家がかつ、ホン書き旅館というのは、かつては京都にたくさんあったのです。今はもうないと思います。

昭和20年代の監督や脚本家は、1年に1本か2本撮ればあとは悠悠自適。小津安二郎などは年1本ですから、神奈川県茅ヶ崎市にある「茅ヶ崎館」という旅館に3ヶ月くらいこもりました。日本酒が100本空くと、ホンが1本できあがるという有名な話がありますけど、あそこに共同執筆者の野田高梧さんが入っているわけです。

一番多かったのは、熱海、伊東、箱根など、温泉場で書くケースが多かったんです。例えば、黒沢明の『七人の侍』は、熱海の旅館にこもりました。黒沢明、橋本忍、小国英雄共同執筆で、この3人は1歩も旅館を出ないで、40日間かけて『七人の侍』の脚本をつくった。こういう時代があったわけです。

戦後・戦前は、1年に1本か2本撮れば十分採算がとれましたが、昭和25年を過ぎますと、日本も貧しさから脱出して、大勢の人たちが映画を観るようになってきたのです。

日本映画の黄金時代

日本映画の黄金時代というのは、昭和25年から33年頃です。この時代がなぜ黄金時代かという、いい映画もたくさんできていますが、それよりも観客動員数です。昭和33年は、11億3千万人の人が映画館に足を運んでいるのです。当時の人口が9千万人ですから、赤ん坊からおじいちゃん、おばあちゃんまで含め、人口で頭割りすると、月に1回は映画を観ていたということになる。そのくらい映画が盛んな時代です。今は1億2~3千万人です。それも当時、11億の人が足を運んだのはほとんど日本映画です。今は日本映画よりも外国映画を観に行く人が多いわけですから、映画人口というのはそれだけ減っているわけです。

私が大学へ入ったのは昭和32年で、映画産業が一番ピークのときだった。それで私は、映画をつくりたいという希望がありました。しかし、英文科に入ったものですから何とかして外国へ留学したいという気持ちも強く、そのためにはヒアリングとかスポーキングリッシュを身につけなければいけないと考えました。ところが当時はテープレコーダーやビデオなど何もありません。しょうがないから映画をつかうことにしたのです。

2食分の弁当と懐中電灯を持って、朝から映画館に入って、最終回まで同じ映画を4回観て、ノートにセリフを聞き取れるだけ写し取って、大体1本の映画を50回観ると、最後はほとんどのセリフが自分でもつかえるようになる。耳でも完全に聞き取れるようになる。それを4本ぐらいやると、西部劇や暴力映画は無理ですけど、普通の映画ですと字幕スーパーなしでも楽しめるようになった。

ところが英語の勉強のために映画を観ているうちに、映画を作ることに興味を持ちました。たまたま私の母の妹が女優をされていて、彼女は、昭和32年に映画界で一番の多額納税者でした。日本映画の一番盛んなときに一番たくさんの主演を演じていた女優ということになります。そういう関係もあったので、ロケやセットの現場へよく見学に行きました。そうするうちに、映画作りをやりたいと思うようになり、映画の勉強を、英会話から映画制作の勉強に変えていったのですね。

友達と映研をつくって、映画を作ったりしていたのですが、卒業の頃

になると、映画産業がどんどん落ちてきて、昭和36年になりますと、毎年、1億人単位か、1億5千万人単位で入場者が減ってくるんです。

入場者が一番多かった時代、映画会社はどのようなことをしていたかという、例えば東映です。東映は、新作を毎週2本ずつ作っていた。これすごいことなのです。今は1つの映画会社を作る映画の本数というのは、例えば松竹が年間何本作るかという、20本か30本だと思っんです。毎週2本ずつ作って、1週間お客さんが入る。立ち見ですごいんですね。次の週にはもう新しいのが出てくる。

そのころ生まれた俳優の中で、スターになった人に中村錦之助、後の萬屋錦之介や東千代之介などの若手がいます。東映の映画というのは、作り方がきまっていたんです。市川歌右衛門、片岡千恵蔵、黒川弥太郎などの大スターは、20人ぐらい相手に立ち回りを、チャンバラをやるわけです。20人斬り倒した後、ハアハアも言わないし、髪一つ乱れない、汗一つかかない。リアリズムじゃないんですよ。大スターが髪を乱したり、尻もちついたり、あるいはハアハア言ったりすると、ファンがみんながっかりするわけです。

ところがアメリカ映画のジョン・ウェインなんかですと、決闘の場面で、「ヘイッ！」なんて言いながら、そばへ行くといきなり相手にパンと殴られて倒れるわけです。このへんから血が出て、ピュッとこうやって、それで「おまえさん、なかなかやるな」というような形で、パンパンと殴るわけです。終わったときには、主役も血だらけ、泥だらけになる決闘の場面を作ります。日本の決闘というのは、主人公は着物の裾すら汚れない。後に内田吐夢演出の『宮本武蔵』あたりから変わってはきますけど、そういう映画の作り方でした。また、お客さんもそうでなければ満足しなかった。

それと、必ず泣く場面がなければいけない。映画館というのは、日常生活を離れて、感動しながら、なおかつ泣かなければ映画じゃないというのが、東映ファンの大多数なのです。ですから『忠臣蔵』など、あの場面が始まると思うだけで観客は泣き出しちゃうんですね。別れの場面をきちんと入れておけばいいのですから、映画を作るのも簡単だったのです。文法があったわけです。その文法どおりにやっていけば、同じものをまた

作っても客は満足したのです。

後の『男はつらいよ』がこれなんです。寅さんは、必ず最後失恋するんです。このパターンじゃないと次へ行けないわけです。あれはシリーズ物ですから撮る方は大変なんです。

映画入場者が多かったもう一つの理由は、映画館の数が今の10倍以上あったからです。笹塚の駅にもあれば、明大前にもある。駅前や繁華街には必ず映画館があったんです。

我々学生時代は授業が休講になると、映画を観に行ったのです。入場料金はラーメン1杯程度。ホームラン軒のラーメンが40円くらいの頃、2本立てが50円くらいでしたから気楽に入れたんです。

勤め人など会社が終わると、帰りにちょっと寄るとか、あるいは夕御飯食べて家族で行くと、最後の1本だけが割引で観られた。映画は、今、自宅でテレビを観るのと同じように気楽にどこでも観られた。そしてそれが最高の娯楽だったのです。今こういうことが残っているのは、インドです。どこの国でもそうですけど、貧しいときには映画館がいっぱいになるんです。

インド映画を観るとわかりますが、ほとんどがハッピーエンドです。暗い映画はだめなんです。昭和30年代の日本人は、映画の中に、スクリーンに夢を求めました。下宿へ帰って火もないところで寒い思いをするより、映画館でみんなで身を寄せ合っている方がよかったです。犯人が追い詰められて、パトカーが来ると、みんな立ち上がって拍手をしたりして、映画と一体になっていた。いうなれば幸せな時代だった。

ところが、これが未だにアメリカでは残っているんです。というのは、アメリカの大学というのはほとんど郊外にあります。私、1965年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に留学しました。今やUCLAがあるウェストウッドといえば、日本人の観光バスが行くほどの繁華街ですが、当時のウェストウッドには、数軒のレストランと、本屋と、週末に開く映画館きりなかった。

学生のウィークエンドというのは、20歳まではお酒は飲めませんし、勉強が非常に厳しいですから、週末は映画に行くわけです。それと高校生も行きます。今でもウィスコンシン州の高校生など、金曜の夜とか土曜日と

というのは、土曜日は昼間行きますけど、金曜の夜なんかは、親が映画館の前まで車で送る。それで映画を観て帰ってくる。映画館というのは今でも大変な娯楽なんです。

あるいはイサカという田舎町にコーネル大学があります。あそこにはコーネル大学とイサカ大学と2つの大学があって、学生、教職員合わせて人口約6万人で、大学関係者だけでできている町なんです。週末になると映画館に行列ができるんです。学生たちが映画を楽しんでいます。

アメリカのアクションものを観ているとおわかりでしょう。機関銃でバババンと撃ち合ったり、爆弾を投げたりしているのに、最後は必ず格闘シーンがあるでしょ。10分間ほど殴ったり、殴られたり、ガラスを破って下に落ちたりして、それでもダーティーハリーが必ず勝つ。最後に格闘技を入れるのは、日本で観ていると何であんなものをいつまでやっているんだと思いますが、アメリカの、高校生の行く映画館では、あそこで全員立ち上がるんです。ワーッとプロレスのリングサイドと同じような雰囲気になって、ポップコーンを投げたりして興奮するわけです。

撮影現場はのぞけるが 脚本執筆現場はのぞけない

映画がどうやって作られているかを知る方法として予告編があります。予告編の中では、映画の撮影現場に必ずもう1台のカメラが| {映画人たちは、カメラをつかわないで、カメラをつかいます。スチール写真を撮る人たちは「カメラ」をつかいます。日本では「カメラマン」というと、映画の撮影をする人。「カメラマン」というと、普通の単撮り写真を撮る人を示します。これも業界用語の1つです。

予告編はファーストという助監督がつくれます。一本の映画に助監督が4人くらいつきます。あと何年かで監督になれるファーストがああ予告編を作るわけです。予告編を作っている助監督の家族は、みんなあれだけを観にいくんです。今日のは良かったとかね。

最近の映画には、例えば『フォーレスト・ガンプ』、あれはいったいどうやって撮影したんだというような個所がいっぱいあります。ヒラヒラと蝶が飛んできて足に止まったり、卓球の試合のところだとか、主人公がジョ

ン・F・ケネディと握手をすとか、ああいうのはみんなコンピュータ・グラフィックをつかうわけです。そういう技術的なこと| {この映画のあの場面はこうやって作られたんだよと説明する映画を、「メイキング・フィルム」といいます。これが逆に1本になってビデオで売り出されています。例えば、ビートたけしが『HANA-BI』を作る。そうすると『HANA-BI』の撮影現場をずっと追っていくものができます。ですから、撮影現場というものは、今の我々は、見ようと思えば大体どの映画のも見られます。ところが絶対に見られないのが映画のホンがどうやって書かれているかです。これがホン書き現場なんです。

先ほど言いましたように、昭和20年代は、監督とホン書きは、熱海や箱根の温泉につかりながら、1ヶ月も2ヶ月もかけてのんびりと納得がいくまでホンを作っていました。昭和30年代になると、毎週2本ずつ新しい映画を封切らなければならなくなった。温泉場で書いていたのでは間に合わなくなってきた。撮影所というのは、松竹は大船にありましたが、東京と京都の2箇所ですから、東京と京都にホンを書く旅館ができ始めたんです。

どこの旅館でも書けるじゃないかと思うかもしれませんが、大体映画をつくらうとか、あるいは作家にならうとかいう人は、これは東映の岡田会長の言葉ですけど、「不良」が多いわけです。昔風の不良ですネ。まともな人はやらない。遊び人風な、要するに昼間はグググウ寝ていて、夜中に騒ぎまわっているような、そういう不良じゃないと映画は作れない。要するに、堅いサラリーマンにならうと考える人はいないわけです。ですから、そういう客をとりだすと、旅館中を昼と夜をひっくり返さなければいけないわけです。一般のお客さん、朝起きる人を入れられないわけです。

「和可菜」には、今でも竹山洋さんが入ってます。この間書き終わったようですけど、2年がかりで大河ドラマ『利家とまつ』を書いていました。それから山田洋次さん。山田洋次さんは、夜明けの3時頃お風呂に入って、それから寝て、11時か12時に起きて朝食を食べる。ほとんどの人がそうなんです。たまに朝型はいますけれども、大体夜中に書いて、昼間寝ている。そういうお客さんをとるとなると、旅館全部をその人たち用にしないと、旅館経営が成り立たないわけです。一般のお客さんが朝早く起きて出て行く。すると従業員が早起きしなければならない。ホン書き旅館という

のは、昭和20年代から30年代にかけて、映画の盛んな時代にはほうぼうにあったのです。

神楽坂の今昔

その1つが先ほど言いました「駿台荘」です。それから築地にもありました。赤坂に「近源」というのがあって、東中野にもあって、それから神楽坂の、今回モデルになった「和可菜」のすぐそばに「川田」という旅館があった。年配の方は知っていると思いますが、かつて川田晴久という歌手・俳優がいました。若い人のために説明しますと、美空ひばりを一流の歌手にした人です。その親戚がやっていた「川田」です。そういう旅館があって、ほとんどが昭和20年代に開業しました。

先ほど言いました私の叔母が、あるとき神楽坂に旅館の売り物があるから買わないかと誘われました。女優をやっていますからお金はたっぷりある。じゃ、買っておこうと、買いにいったら、売り主が自分と同じ名字の、(芸名は木暮実千代、本名は和田つま)和田なんですね。これだったら登記も簡単だ、というような軽い乗りで買ったわけです。それが現在の、たった5部屋きりない旅館だったわけです。

神楽坂というのは色町なんです。「色町」という言葉は今ではなくなっていますけれども三業地です。いわゆる料亭の多いところだった。「料亭」という言葉は、これは戦後、料亭という言葉になったんですけど、昔は「待合茶屋」と言いました。戦後条例が変わりまして、料理屋と茶屋が合併して料亭になったのです。料理を出して、なおかつ宴会をさせて、昔は茶屋ですから泊めたんですけど、今は一切泊めてはいけません。要するに、お座敷遊びの場所を貸し、料理を出すところになったわけです。これがいわゆる三業地です。これが昔の色町との違いです。昔から色町で有名なのは、柳橋、浅草、向島、新橋などです。明治時代は、芸者というのは非常に格の高い職業でした。ですから、明治時代の有名な政治家は、ほとんど芸者だった人を奥さんにしています。そのくらい芸を厳しく仕込まれているわけです。

叔母が旅館を買ったのが昭和28年です。買って、ほっておいたら近所

から文句がきた。色町の真ん中に1軒だけ電気も点けない家があるのは困る、何とかしてくれと。それで叔母の一番下の妹に、「あなた、あそこへ行って女将やりなさいよ」と言って開業したのが昭和29年です。

ところが、待てど暮らせど客が来ない。やっとお客さんがつき始めましたが、一番下の叔母は、私の母が長女で、彼女は四女なのですが、普通の旅館業では物足りなかった。なぜかという、三女の姉が映画を撮っている間、ずっと付き人をしていて、映画界に非常に詳しくたのです。それと昭和20年代というのは、溝口健二さんや黒沢明さんなどが海外で賞をとるようないい作品をどんどん撮っていた時代。いわゆる本当の映画作りを見ているものですから、どうしても映画のお客さんを取りたい。それで「ホン書き旅館」、当時はまだ「ホン書き旅館」と言わなかったんですけど、台本を書く人を泊めるようになったわけです。

台本を書く人を泊めると、思わぬ実入りもあるんです。なぜかという、ふつう作家は部屋に一人で入ります。宿賃は1人分きりもらえないわけです。飲んだって、せいぜいお酒とコーヒーぐらいですから店の売り上げにあまり貢献しない。ところが映画の脚本というのは1人では書けないんです。プロデューサーが毎日のように打ち合わせに来る。打ち合わせを終え、そのまま泊まっていくこともあるので、1部屋が何人にも稼働するわけです。これなら一般のお客さんは一切断って、ホン書きさんだけの専門旅館にしよう。こうなったのが昭和32年です。よもやそれが今日まで続くと思わなかった。

「出世旅館」が生んだ人々

不思議なことに、あそこの旅館で書いたものはヒットするという噂が広まる。それから、昭和40年代になるとあそこで書いた小説が当たったとか、賞をとったとか、次々と出てくるわけです。それで別名「出世旅館」という噂が業界に流れるわけです。

事実、その頃、これから伸びようとする人たちが大勢来ていたので、これは当然なことなのです。例えばOLをやめて初めての作品『BU・SU』という作品を書いた内館牧子さん | {今やあそこまで立派になったけど、初

めてあそこへ来たとき、これは記録に残るからまずいんですけど、履いてきた靴も本当にボロで、質素な格好して、それで一生懸命書いて偉くなっていったのです。

今日の演題の頭に『ウルトラマン』とありますが、ウルトラマンの話はもうちょっと後にしまして、『ウルトラマン』の後半と一緒に書いた市川森一という、今4チャンネルでよくコメンテーターとして出ていると思うんですけども、市川森一さんは、あそこで『快獣ブースカ』を書きました。

私、この本の中で「ブーカス」って書いてしまったらすごい手紙がきまして、誤植だと。今の30~40代の方は、小さいとき毎日『快獣ブースカ』って歌っていたらしいんですね。歌詞まで書いて、20通くらい手紙が来て、「すごい間違いをしている。すぐに直せ！」って言われました。

論文なんか書くと、いくら間違っているても一切指摘がないんですけど、こういう単行本を出すと、約2ヶ月間の間に、間違っているとか、あれは違うとか、あるいはよくやったとか、いろんな手紙がくるんです。中にはCDまで入れてきて、ちゃんと「ブースカ」と歌っているじゃないかと。そのくらい人気があった番組です。その市川森一さんも日大を出てまだ脚本では食べられない時代に、助手として金城たちと一緒にこの旅館で、『ウルトラマン』を書いているうちに出世していった。

映画監督でも、たくさんいます。渡辺祐介さんという人は、数多くの優れた作品を撮っていますが、有名なのは、いかりや長介主演の『全員集合!』シリーズですね。それから瀬川昌治さん。シリーズ物では「寅さん」がギネスブックに載る48作までいきましたけど、その前に松竹には、あれの下地になるものがあるんです。瀬川さんが撮った急行の専務車掌の話がね。この専務車掌は必ず女にふられるという喜劇がある。これを渥美清さんがやっている。こういう若手が入ってきて、喜劇のシリーズ物を書き始める。そこへ深作欣二さん、あるいは石井輝男さんなど東映でやくざ路線、任侠路線を撮る若手の監督たちが入ってきて、昭和30年代というのはすごく栄える時代があるわけです。

皆さん若くて勢いのあるときに入ってきていますから、当然出世していくわけですが、それがなぜか、あそこに入ると…となるのです。というのは、映画とか芝居、あるいは出版もそうですが、これらを水商売と言

ます。水物、当たれば大きいけど、外れればゼロなんです。ですからパーや何かと同じように水商売と言うわけです。水商売の人は縁起をかつぐんです。特に映画なんかは、例えば『忠臣蔵』を撮るとなると、社長以下関係者全員が泉岳寺にお参りに行ったり、『武蔵』を撮るとなると、武蔵のゆかりの地を、NHKのスタッフが訪ねたりします。あれは宣伝だけではなく、縁起をかついでのことです。それが強い世界なんです。

これは日本だけではなくそうです。外国でもすごくそういうものを持っているようです。映画で働く人たちって何か共通の、何億、何10億もかけて、撮って、当たらないときは全くだめになるわけですから、1つ1つに縁起をかつぐわけです。それで「和可菜」に、別名「出世旅館」という名前がつきはじめ、有名になっていくわけです。

テレビの普及で映画は衰退

ところが昭和34年だと思うんですけど、現在の天皇、皇后が結婚されました。このとき日本では、御成婚の中継を観たいということで、テレビが各家庭に一斉に入った。それまでテレビというのは新宿の駅前だとか、公民館だとか、家庭にはほとんどなかった。そのテレビが小型化されて各家庭に入ってきた。これが御成婚のときです。その後、昭和39年に東京オリンピックがあります。このときにも家庭にテレビがドッと入るわけです。これによって何が起きたかということ、映画がだめになってきた。もう映画館に行く必要がなくなった。

初期のテレビというのは非常にチャチだった。なぜチャチかということ、ビデオテープがないので全部ナマ放送なのです。ですからドラマをやるときには、この部屋ぐらいのスタジオに3つか4つのセットを組む。背広を着て会社のシーンを撮ると、ワーンと走りながら着物を上から着て、帯締めて、そして茶の間に座っているわけです。だから時々着物の下からネクタイが見えたりした。時代劇なのにジャンパーを着たアシスタントが画面に入ってしまったたり、いろんなことがありました。非常にチャチだったけど、何しろ家庭で見られる。外へ出なくていい。これで映画が衰退していった。このときにもう1つ映画界は大きなミスを犯したんです。

映画を撮るときに「ハイ、本番いきます」と言うと、シーンとなるわけです。そしてスタートでカメラが回り、フィルムがグーッと送られていく。あの音を聞いているときの緊張感。ワンカットは、だいたい2秒から4秒なんです。2秒から4秒カメラを回して、「カット」と言うときの、あの瞬間の緊張感。ところがテレビになると、モニターでやっている。もう1つの一番の違いは、フィルムです。映画のフィルムは1秒で24コマ回ります。「ヨーイ、スタート」で3秒回すと24枚撮り3本分のフィルムをつかうわけです。フィルムは決して安くはないんです。

黒沢明さんなどは、ワンカット撮るのに3台のカメラを回しますから、「ヨーイ、スタート」と言って3秒回ると、そこで9秒回ることになる。そのうちの2台分は捨てちゃうわけです。失敗するとまたやり直し。だからコストが全然違うんです。

ビデオテープというのは、500円ぐらいで何回でもやり直しがきく。だからダメが出て、もう1回やり直せばいいやとみんな笑っている。映画の場合、プロデューサーなんか顔が引きつってくるわけですよ。フィルムが、きょうは予定より3倍もオーバーした。現像費を入れると今日だけで200万円余分に予算がオーバーしたとか。映画育ちの人たちにとっては、テレビに変わったときに、スーッと入っていけなかったのは、制作現場の醍醐味が忘れられないからです。

私もそうでしたが、大学出たときに、映画会社に助監督の試験を受けに行こうと思って叔母に紹介状をもらって行ったら、「ああ、現場に来ればいいや。ただし、給料出ないよ」。「給料出ないよって、いつまで出ないんですか?」、「ずっと出ないよ。これから映画はだめだけど、好きだったらやってる」って、そう言うんです。しょうがないから大学院に行ったら、学者にさせられちゃって、道を誤ったようです。

そのとき映画青年だった我々の仲間はどうしたか。テレビに行ったんです。テレビに行けたのはいいんです。みんな偉くなりましたから。ところが本当に映画が好きだった連中は、どうしてもテレビに行けなかった。特にヌーベルバーグの大島渚さん、篠田正浩さんなど、革命的な若い監督が活躍していますから、そういうものに憧れますから、どうしても映画を捨てられなかった。その捨てられなかった人たちが取り残されちゃって、映

画では食べられなくなった。

ところが、ホン書きというのは、映画を作っている現場は知らないんです。撮影現場にはめったに行かないのです。撮る前の台本を作っているわけですから。ですから、ホンがテレビにつかれようと、映画につかれようと、書いている本人の意識はそれほど変わらないわけです。

ドラマはドラマなんです。テレビもやがてフィルムを挿入したり、録画ができるようになってきたので、脚本を書く上では映画もテレビも違いがないわけです。刑事、追う。犯人、逃げる。踏み切り、電車が入ってくる。こういうシーンは映画が撮ってもテレビが撮っても同じですから、ホン書きたちは仕事にあぶれなかった。映画がだめになったけれども、テレビの仕事が入ってきた。

映画監督、映画の脚本を書く人、あるいは芝居を書く人だけでもっていた旅館は、テレビの普及で閉館に追い込まれるはずだったが、ホン書きたちがテレビへ移行して相変わらず仕事をしたわけです。ところが、昭和40年代に入りますと人件費が高くなって、一晩中起きている人を相手に働いてくれる人がだんだんいなくなってくる。それで1軒また1軒と、つぶれていくというか、店じまいをしていったわけです。先ほどの「駿台荘」もそうです。

作家の登場 野坂昭如の遁走劇

「和可菜」の場合は、作家が入ってくるようになったのです。それまで作家は考えなかったんですけど、最初に入ってきた人が野坂昭如さんです。昭和47年、直木賞を取る前後だと思います。

野坂さんは、私もこの本を書くために何回かお会いしましたが、仕事を始めようとする、そこから何とかして逃げようとする、始める前までは、引き受けて「やるぞっ」と言って、机に向かう。すると逃げたくなる。自宅で書いていると逃げたくなるからよそへ行く。特に出版社のカンヅメの部屋に入れられると、どうやって逃げるか、逃げることしか考えない。

作家は、出版社が費用をもってカンヅメにする場合と、費用自分持ちの

2通りあります。野坂さんはほとんど自前です。あのころ「オール読物」・「小説新潮」・「小説現代」、最低でも3つの月刊小説の締めきりを抱えていました。そのほかエッセーや単発物がありますから、4~5社の編集者が全部の部屋を借り切って寝ずに番をするわけです。その中からどうやって逃げるかという逃走劇があった。これは有名なんです。そのときは、今作家になっている村松友視さんが野坂番で、彼は中央公論で入っていましたが、玄関隣の部屋で寝ずに番をしたのに逃げられた。未だに語り種になってます。

作家が入ってきて旅館も驚きました。なぜかという、野坂さんは、1時間毎に、ビールを6本入れておけば、あとは用はないと言うんです。映画の人たちはうるさいんです。電話貸してくれとか、おにぎり作ってくれとか、打ち合わせをワーワー、ワーワーやって、そのうち大喧嘩になるんです。作家ってこんなに手がかからないものかと従業員は一樣に驚いたそうです。1時間ごとにビールを6本持っていけばいい。それで明け方3時ぐらいになって原稿ができあがると帰って、また翌日来る。野坂昭如さんに続いて、中上健次さん、高橋三千綱さんなどが入ってくる。

映画人と作家が同じ屋根の下で同じ仕事をする。ホンを書く、原稿用紙を埋める、ということは同じ作業なんですけれども、そのプロセスは全く違います。なぜかという、作家は自分1人の責任で原稿を書き進め、非常に孤独な作業を経て作品をつくります。作品の善し悪しは全て自分の責任です。ところが、芝居や映画の台本というのは、書いている途中で監督とかプロデューサーが読んで検討が始まるわけです。これはだめだとか、ここでこんなことをやったら金がかかりすぎるとか、ここで脱がせろだとか、ワーワーワー議論する。だから自分の創作であるけれども、原稿が仕上がるまで1人で仕事することは少ない。共同作業なのです。そのかわりできあがってしまうと、ホン書きは口を出せないというか、ほとんど出すこともないのです。映画ができあがるまで、自分の作品が、書いたものが、どういうふうにできあがってくるかということがわからないでお終いになる。こういうケースが多いわけです。

優れた脚本は共同執筆が多い

いい映画というのは脚本を書くとき、2人が3人で共同執筆しているケースが多いです。例えば、山田洋次さんは朝間義隆さんと必ず共同執筆なのです。ほとんど2人で書いているわけです。先週封切りされた『たそがれ清兵衛』も2人で書きました。

渥美清さんが亡くなったとき、松竹が危機だと言われたことがあります。というのは、「寅さん」の興行収入で松竹社員の給料がほとんど支払われていたからです。収入の40%以上は「寅さん」が稼いでいたわけですから、作る方はいかに大変だったか。年2作ですよ。同じパターンじゃなければいけない。だって観ている人は、寅さんがマドンナと結婚しちゃったら、みんなブーイングです。最後はふられてまた旅へ出て行く。あのパターンの中で、なおかつ人の心にジーンとくるものを作らなければいけないわけですから、大変な作業だったわけです。

最近書いている『釣りバカ日誌』は、ワーワーワーやりながら若手が書いています。けれども、やはり最後は山田洋次さんと朝間さんが入って、締めるところを締めないと…。これは裏話ですが、西田敏行さんや三國連太郎さんなど^{そうそう}錚々たる俳優をつかえる監督がいなくなっているんです。「これは山田さんの脚本だ」ということで納得させ、そのとおりにさせないと。三國連太郎さんは、自分でも映画を撮った人ですから、「こんなのはだめだ、ここは書き替える」と、すぐ現場で始まっちゃうのです。「いや、これは山田さんの脚本ですから」ということで、いつも巨匠が入るわけです。

日本では共同執筆というのが少ないんです。ところがアメリカでは共同執筆というか、合同執筆というか、チームでホン作りをします。女と男の別れの場面でこういう別れ方をさせたいと脚本家が指示を出しますと、別れ用の会話だけを書く専門家がいるんです。「スピーチ」という会話の専門家がいるんです。例えば大統領の演説原稿などもスピーチ専門の人が草稿を書きます。それと同じように、映画の中でも会話だけを書く脚本家があります。

アメリカの場合には、アメリカ映画をご覧になるとわかりますけど、脚

本家の名前は1本で出ます。画面に単独で名前が出ることを1本と言うんです。日本では、タイトルに名前が1本で出るのは、監督とたぶん制作者だけです。制作者も大作じゃないと社員がやるものですから、他と並んでいたりします。映画のタイトルに1本で出るというのは、あとは主役です。

それから日本にない専門職に、「キャスティング」があります。アメリカでは、この映画のこの役に誰をつかうかは、この「キャスティング」がすべての権限を握っている。ですから主役クラスの人でも、オーディションを受けさせ、台本を読ませ、取り替えるというケース、たくさんあります。たしか『卒業』という昔の映画でミセス・ロビンソンをやった人が途中で変わっているはずですが、そのくらい権限をもっていて、これなんかもタイトルは1本です。

日本では、脚本家がタイトルに1本で出てくるなんてことはめったにない。こういう扱いですから、ホンにかけのお金というものも非常に少ないのです。

で、執筆現場の話ですが、東京や京都にあったホン書き旅館は、「和可菜」を除いて全部なくなりました。赤坂にあった「近源」が最後まで頑張ったのですが、昭和60年で店じまいしました。それまで山田、朝間組は、そこで「寅さん」を書いていて、35作目から「和可菜」に入ってくるわけです。

なぜ「和可菜」に入るのが遅かったかということ、実は山田洋次さんの師匠たち、かつての巨匠たちが皆あそこで書いていたからです。今井正、内田吐夢、田坂具隆さんなど、錚々たるメンバーが入っているものですから、あそこに来ると書けなくなるのだそうです。

これは不思議なもので、後に、先ほど話に出ました村松友視さんが家を建て替える間、仕事をしようと「和可菜」に入ったんですね。3日、4日たっても1行も書けない。そのうち野坂さんが、「おう、おまえも偉くなったな」と言いながら夢の中に現れてくる。その一言で汗ぐっしょりになるんだそうです。そのくらい徒弟制度というのですか、先輩・後輩がきちんとしてる世界ですから、先輩が同じ建物のどこかにいるというだけで書けなくなるそうです。ところがテレビ界になりますと、先輩も後輩もなくなって、今はそういうことはなくなっているようです。

この旅館、今年でちょうど50年になります。私は、自分が映画を作る人間になりたかった。だけどなれなかった。そこでホン書き現場の雰囲気だけはずっと味わうことにしました。

燃えつきたウルトラマン

「和可菜」に一番若くして入ったのは金城哲夫です。私、あまり彼のことは話したくない。というのは玉川学園高等部時代、さんざん2人で悪いことをして歩いた学友なのです。彼はあそこで『ウルトラマン』を書いて本当に燃え尽きた。宿の人たちは金城が寝るのを見たことがないと言っています。自分で演出もやれば台本も書く、出演もする、それから経理というか、いわゆる制作まで携わるわけですから、本当に青春時代を燃やしてしまっただけです。

『ウルトラマン』を彼が書くようになったのは、すでに高等学校時代に始まっていました。玉川学園というのは田舎にありまして、小田急沿線ですけど、一緒にいると「おっ今な、宇宙から降りてきたぞ、宇宙船が」と、急にボソボソ言い出すわけです。それから自分の空想の世界に入ってしまう。彼は私と一緒に映画作りをやろうと言ったんですけど、私とは全く合わないんです。こちらはメロドラマをやりたい、できたら女優さんと仲良くなって…。昔の監督は女優さんをお嫁さんにした人が多いので、そんなことばかり考えている。向こうは、妙な名前を付けた怪獣がいま闘ってるとかね。空想の世界にどっぷりつかっているんですね、高校生で。大学出たら、すぐに円谷プロへ入って、で『ウルトラマン』。

『ウルトラマン』というのは、昭和39年の東京オリンピックのときに、体操でウルトラCというむずかしい技を示しました。三回転宙返りなどやると、アナウンサーが「ウルトラCが出ました!!」って。あのウルトラから「ウルトラマン」という名前を考え出す。金城は、そういうものをつかむのがすごく早いわけです。

『快獣ブースカ』、あの快獣も、私は怪獣の「怪」だと思っていたんです、お化けのほうの。そうしたら愉快の「快」なんですね。愉快的快獣のブースカ。たった一字の漢字の違いですけども、タイトルを考えると

に完全に遊びを入れているわけです。優れた映画、よき時代の映画というのは、映画の中にすごく遊びがあるんです。遊びというのは非常に贅沢なことなのです。誰も気がつかないけれども、作った人たちは遊びを1カット入れるためにすごいお金と時間をかけて、ホラみる、楽しかったなあれは、なんていうような遊びを巧みに入れている。また、そういう遊び心がない映画は、ヒットしない。これは外国も同じだと思うんですけども、ものを作り出すときに、作っている本人に遊び心がないと、形どおりのものしかできない。

執筆現場を見ますと、ワイワイガヤガヤすごい議論をしています。夕方3時、従業員の方が寝られないくらい大議論が始まるわけです。物を投げたりはしませんけれども、大喧嘩が始まる。そしてまた、そういうふうに議論があったときの映画は非常によくできていると、後から映画を観て、従業員の人たちが言うわけです。今度の映画は、みんながあんなに大喧嘩してただけあって、よくまとまっている映画だと。

それから、苦しんで苦しんで、特に「寅さん」では、もう逆さにしても血も出ないというくらい脚本が難航することがあります。

一番大変だったのは、幻の49作のときでした。もうロケ地も決まっていたわけです。高知県でやる。それから西田敏行さんをつかうために彼のスケジュールも押さえてあって、さあいよいよ脚本を書こうという8月に渥美清さんが亡くなっちゃったわけです。ところが何も撮らないと、松竹はその年のボーナスが払えない。それで押さえてある西田敏行さんを主演にして、ロケ地も、高知じゃなくて愛媛県にしたと思うんですけど、映画館の館主の話。タイトル忘れちゃったけど、観ていて気の毒なぐらいお粗末な映画でした。お粗末なんて言っただけは失礼ですけど、本当に苦しんで食事も喉を通らないような思いで作っているわけです。

そういうふうに監督やホン書きが追い詰められたときの作品というのは、いいものもあるかもしれないけれども、ゆとりがなく、結局、評判が良くないようです。

女性ライターが活躍

今、テレビのホンを書いている人の多くは女性です。女性は締め切りをきちんと守るのでテレビ局に信用があるのかもしれませんが。

男は逃げちゃったり、飲んじゃったり、女のところへ行っちゃったりと、ともかく締め切りに間に合わせない。追っかけて、追っかけて、例えば、先ほど野坂さんを編集者が追っかける話をしましたが、映画もそうです。ホン書きを監督やプロデューサーが来て怒鳴ったり、そうかと思うと社長がちょっと差し入れに来たりして、いじめていじめて、可愛がって可愛がって、それでいいものを作らせるのですから、こういう時代のものはすごく良かったんです。

今のテレビドラマがなぜつまらないかというと、女性のライターというのは、まじめにきちんと勉強する| {ホンを書くことを「勉強」と言うんです、あそこの旅館では。締め切りにきちんと間に合わせる。それからプロデューサーの言うこと、ディレクターの言うことを全部取り入れて、上手にまとめる。だから 트렌ディドラマなんか観ていると、何となく嘔き出しちゃうような、セリフも宙に浮いたような、それでもプロデューサーやディレクターの好みをちゃんと知ってきちんと書くわけです。ですからそのへんが...

男性の作家も最近、きちんと締め切りを守らないと、次からは仕事がきません。本や雑誌でもそうですが、原稿が遅れると次はもう結構ですとなるようです。

今の時代ですごいのは、作者と編集者が一度も会わないで単行本一冊作ってしまうことです。Eメールで全部終わらせちゃう。両者が顔を合わせなくても本が出るような時代になっちゃったわけです。本もそうですが、何でもそうですが、遊び心やゆとり感覚が欠如してきているので優れたものが生まれなくなっています。

叔母は80歳になりましたが、その日が来るまで、死ぬまでこの仕事を続けるそうです。今やめると、困る人がいるからです。山田洋次さんは、まだこれから何本も撮りたいという。それから今や脚本家としては一番の売れっ子の竹山洋さんは、「和可菜」でなければ書けないといっています。

なぜか脚本書きには早稲田出身が多いんです。明治は少ないんです。川島雄三さんや岡本喜八さんなど監督は数人います。昭和1桁生まれの監督は、ほとんどが東大です。おそらく当時の文学部卒には就職がなかったんでしょう。日大は芸術科がありますので日大出身の脚本家は非常に多いです。それから上智とかエッと思ふような大学の出身者もいます。

明治出身の有名な脚本家としては、舟橋和郎さんがいます。かつて文学部の教授をされていた作家舟橋聖一さんの弟です。この人は脚本家として有名でして、今井正監督作品や、賞をとった作品を何本も書いています。「和可菜」には長いこと入っていました。今も健在で、もう仕事はされていないようですが、お兄さんの作品、『雪夫人絵図』や『芸者小夏』など、いろんなものを脚色しています。

ノンフィクションを書く時は登場人物に惚れること

本に書いたことの中からエピソードを選んでとりとめもない話をしてきました。ノンフィクションを書くのはこれで4冊目で、最近ノンフィクション作家なんていうタイトルをつけられています。ノンフィクションを書く場合、登場人物から絶対に文句がこない書き方というのがやっとわかったんです。それは登場人物に惚れるということです。愛情をもって筆を進めることです。

今回は、この本ができあがったあと、ここへ出てくる方が集まってパーティを開きました。「俺は最初、この著者に会ったら殴ってやろうと思った。なんだい、君は俺のこと惚れてるんじゃないか」なんて、下飯坂菊馬さんから握手を求められたりして。「そうですよ。だから書かせてもらったんです」と答えました。

ノンフィクションというのは、憎くてとか、敵討ちとか、昔いじめられたから、こういう気持ちやいきさつがあったら、そういう人のことは書かないほうがいい。自分の書く本の中に登場してくる、あるいは、していただく人物というのは、自分が惚れて惚れて、好きで好きで、作品だけでなく、人柄も、あぁいいなど。こういう思いで筆を進めるべきだと思います。

何か質問ありましたらどうぞ。

質疑応答

司会 ありがとうございます。何かお聞きしたいことがありましたらどうぞ。

黒川 あっ、ひとつ忘れていました。本の中には詳しく書いてあるんですけど、この宿、一時つぶれかけて、明治大学の学生課にお願いして、受験宿にしてもらったことがあります。指定宿に。2月に受験生が入って、3月に「寅さん」が入って、それで何とか生活費が稼げた時期があるのです。ところが、これまた「出世旅館」で、あそこに泊まった受験生はよく合格するんです。だけどよそへ行っちゃうんです。というのは、入学式に挨拶へ来ると、「あれっ、明治じゃなくてどこへ行ったの?」「早稲田へ行きました」なんて言ってね。やっぱりこれって「出世旅館」なのかな、従業員の人たちは笑ってました。今でも彼女ができると連れてくるとか、結婚すると、「これ、俺が受験のときに泊まった宿だ」なんて新妻を連れてくるそうです。

昭和60年代でしたか、受験生が多くて、和泉のこのへんも民宿までいっぱいになったことがありましたね。

司会 「和可菜」という旅館の場所ですけど、毘沙門天の前に洋服屋さんがありまして、洋服屋さんとその間に1メートルほどの路地ですね。本当に1メートルほどの路地があるんですが、そこをずっと行くと「和可菜」というところに行きます。ちょっと神楽坂のほうから行くとわかりにくいかなというふうな。

黒川 角に「五十番」という中華そば屋があります。あそこで聞けばわかります。行ったらかまわず格子戸を開けて中を見てください。この頃見学者が多いらしいんです。朝早く起きなければ泊まれません。ちなみに朝食付きで、どの部屋をつかっても1万1千円だそうです。ホン書きや作家は、狭い部屋じゃなきゃだめだと、四畳半じゃなければ絶対だめだという人が

多いんです。それから布団を上げると怒る人が多いんです。寝たいときに寝て、起きたいときに起きたいからこの商売を選んだ。布団なんか上げられたら困るというので、手間はかからないです。特に昭和1桁生まれの人たちは、本当に手間がかからない。何でも自分でやったそうです。

マーガレット・プライスさんという、夏目漱石のお孫さんと結婚したオーストラリアの新聞記者だった人が、この旅館を外国で宣伝したために、今は外国のお客さんでにぎわっています。外国のお客さんは、ここはこういう旅館だということをちゃんと知っていて、物見遊山じゃなくて、日本の作家たちが泊まる旅館だというので、ちゃんと協力して朝もゆっくり起きてくれる。「日本の宿50選」の最初のページに大きく出たものですから、最近では外人が多いそうです。

司会 お話しいただきまして興味に残ったところというのは、映画の中に遊びを入れているのはいい作品だとか、遊びを入れているとか、ゆとりがあるとか。それから、作った本人が楽しんでると。作った本人が楽しむというのは、きっと観る人も楽しいものになるんだろうと思います。何かものを作ろうというのは、きっとこういうことではないかと思います。

黒川 無駄があると言うんですか。何であのカット、例えば「寅さん」の夏の作品では、入道雲があって、セミが鳴くんです。ミンミンミンで。

それから黒沢明監督の映画で、少年が大きな農家の屋根に向かってボールを投げるシーンがある。『八月の狂詩曲』だったかな。秩父のほうに大きな農家のセットを作って、その屋根に向かって少年がボールを投げるわけです。そうすると、ボールや屋根は映らなくても、アクションだけでボール投げのイメージは出てくる。私、それ観ていたら、次はロングでずっと引いて、少年が投げている屋根が全部映るシーンが出たんです。今まで黒沢明さんって、ああいうことをやらない人だったのに。イメージで伝わるわけですから、それでいいんだと思っていたのに何であんな無駄なことをしたんだろう、へーッと思っていたんです。たった3秒ぐらいですけどね。2、3年して、黒沢明さんが、「あの屋根を作った、セット作ったやつらがいるんだ。あの3秒がやつらにとっては…」と雑誌の対談で話しているんで

す。あの3秒、無駄なんだけど映すことで、スタッフは自分がやった仕事が評価されたとする。あれは無駄だと思ったけど、スタッフも大事な制作者なんだからということ。その1行を対談で読んだときに、ああやっぱりそうかって。その^{わらわ}葺屋根をつくった人たちへの思いやりなのだ…。

それから、日本では映画が終わるといっせいに立つんですネ。次の回の人たちがワッと入ってくる。アメリカとかヨーロッパは入れ替え制ですからこういうことは起こりません。1960年代の学生時代にイギリスで映画を観たことがあります。映画が終わると国歌が流れて、旗がゆらめいて、全員が立って国歌を聞いて帰るわけです。

最近の映画はスタッフの名前が最後に出るのが多いんです。小ぢな字で出んですけど、あの小ぢな一字のためにすごいエネルギーを使って、大体50から100人のスタッフで作ってるわけです。制作に関わった人から見ると、あんな小さな、外国映画だとずっと並んで出てくるし、日本でも、結髪とか、車両手配とか出てきますけど、あれが、作っている人にとっては、タイトルに出るといことが、その人の仕事への誇りなのです。ですから、観客はあそまできちんと観なければ失礼なのです。

テレビがいやなのは、沖縄でロケをやると、用もないのにホテルのフロントや庭が何回も映る。ああこれって、スタッフがタダで泊まっているからだなと。全日空の飛行機が出る。ああこれ半額で行ったからだなと。スポンサーとのタイアップが明らかすぎるのです。かつての映画にはなかったことです。

昔は、「寅さん」がそうでしたけれども、どこかでロケをやると、そこがワッと有名になって大勢の観光客が来たものです。映画の影響です。ああいうふうで大勢の人が観るものは強いわけです。

司会 ありがとうございます。本日はこれでお開きといたします。先生がおっしゃいました、字幕を最後まで見る人と字幕を見ないで立つ人とがありますが、本日は最後までご清聴いただきましてありがとうございます。

(拍手)